

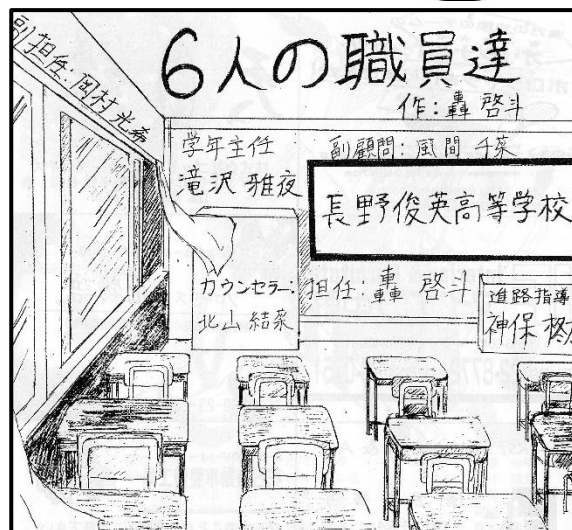
平成30年度 月刊 校長通信 6号

(生徒・保護者版) H30.9.28(9月号)



俊英NOW

●演部劇 初の金賞



9月18日(土)、北信高校演劇合同発表会があり、本校演劇部オリジナル作品『6人の職員達』が、金賞を受賞し、県大会へ出場することになりました。金賞は、出場13校中2校のみで、創部以来初の快挙です。この作品は、俊輝祭で大賞を獲得し、私(校長)も注目していましたが、合同発表会では、さらに完成度が上がっていました。イケメン男子「もてすぎ君」、謎の校舎転落事故にからむミステリーが、今話題のトランスジェンダーの問題に発展していく。このオリジナル脚本を書いた轟啓斗君には才能を感じました。また、轟君をはじめ6人の役者さんの演技力、スタッフ諸君のサポート、そして顧問の花岡・山口先生の指導にも敬意を表します。

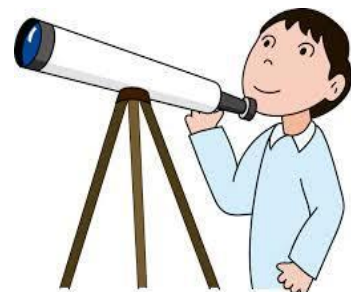
●弓道部団体女子 こちらも初の入賞



9月23日(日)、秋の新人戦弓道大会が行われました。山口・若林・春原の本校女子チーム(3人とも2年5組)が70チーム中8位で入賞し、創部3年目にして悲願の県大会出場を果たしました。私(校長)も弓道経験があります。写真の山口さんの射形はとても良いと思います。今後の修練に期待します。また、激務のなか、熱心に指導して下さった田島教頭先生にも感謝します。



「星を見ながら……」



8月から9月にかけて、夜空は素晴らしいことになっていました。空が暗くなり始めると、西の山ぎわに金星がギラギラと輝き、南の中空には木星が、これまたギラギラと輝き、東の空には15年ぶりに大接近した火星が赤くギラギラ輝いていました。この3つの惑星は、他の星々と比べ圧倒的に明るいのでとても目立ったはずですが、もし気付いていなかったとすれば、「ポーっと生きてんじゃねーよ!」ということになります。さらに付け加えれば、木星と火星の間にもう一つ明るい星が見えていました。先の三つほどの明るさはありませんが、それなりに目立っていたはずですが。この星は土星です。金星・木星・土星・火星という惑星のスーパースターが一挙に夜空を飾ることは、そうめったにあることではありません。

実は私、夜空を見るのを趣味としておりまして、スマホには「星座表アプリ」が入ってますし、小さいながらも割と性能の良い天体望遠鏡を持っています。そして時々、星を覗いては、日々のストレスを癒しているのです。金星は、月のように満ち欠けをします。今、金星を覗けば三日月に見えます。木星を見れば、ぼんやりとした横縞が見えます。そして4つの衛星（ガリレオ衛星という）が日ごとに位置を変えて木星の周りを回っているのが分かります。土星を見ると、うそのようにちゃんと輪が付いているのです。そして火星は、赤い光のしずくのように美しく輝いて見えるのです。

こうして星を覗いているうちに、思い至ったことがあります。「水」が液体として存在することが、生命体が生まれる最低条件です。これは太陽からの距離によって決まります。近過ぎれば水蒸気に、遠過ぎれば氷になってしまいます。近からず、遠からず、太陽からの程よい距離が必要なのです。アメリカの天文学者マイケル・ハートという人が、程よい距離を計算したそうです。それは、太陽から地球までの距離を100として、95~101の極細の範囲だとか。宇宙空間に占めるほんのわずかな極細の円のなかに、地球の公転軌道が偶然にもギリギリでハマったことが、地球上に生命が誕生し、最終的に人類が生まれる絶対的な条件になったのです。このことも含めて、今、私たちが地球に生きているということは、果てしなく無数の偶然の織りなす結果なのであり、「有り得ない」貴重なことなのです。それはおそらく宝くじの最高額に当選するより、何千倍も難しいことだと思います。私たちは、そのことをどれだけ実感しているでしょうか。

自分が「生きている」ことがいかに「有り得ない」ことか、このことを実感することは、きわめて重要なことです。ちなみに「有り得ない」とは、言葉を換えると「有り難い」ということです。自分が今ここに生きていることが「有り難い」と実感し、それがいかに「ありがたい」ことかを悟ることこそが生きていくことの原点ではないでしょうか。

